

本光寺 飛龍 仏教壮年会報

婦人会だより 合同版

2008(平成 20)年

6 月発行 No.51

● 夏のような日になったり、雨模様で涼しい日になったり、天候はまだまだ不順、体調にお気をつけください。そうはいっても、もう田植えの季節、花も咲き、雑草も伸びてきています。庭の花を育てるには待ってられません。いろいろ植えてだいぶにぎやかになってきました。



**仏壮連盟  
総会・研修会  
のお知らせ**  
6 月 15 日(日)  
午後 1 時半より  
会場:真竜寺  
会費:未定  
出欠の連絡は会長まで  
会長 国分正剛 27-8066

● 仏壮・仏婦ともに、別欄の通り各連盟の総会があります。役員会で詳細が決まって正式のご案内が参りますが、とりあえず日程は決まっておりますので、お知らせをします。予定を空けておいてください。

● 見頃西光寺の大晦日の除夜の鐘突きは、吹雪でお参りに伺えませんでした。そこで、螢の会ので蕎麦を打ってご接待しますのでぜひおいでくださいと、ご案内をいただきました。そこで、別紙の通り研修旅行を企画いたしました。とても美味しい蕎麦です、一緒に行ってみませんか。ちょっと費用はかかりますが、みんなで楽しく行けるようにバスを借りることにしました。



**仏婦連盟  
総会・研修会  
のお知らせ**  
6 月 14 日(土)  
午後 1 時半より  
会場:正覚寺  
出欠の連絡は会長まで  
会長 佐藤徳枝 27-6710

## がばいばあちゃん お寺へ行こう 島田洋七

### \*川には野菜やお仏壇も

ばあちゃん家の前には多布施川が流れていた。施が多い川と書くが、貧しいウチにとってはまさにその通り。ばあちゃんは川に木で柵をつくり、引っかけた木を乾かして薪にしていた。下駄の片方が流れてきたこともあって、僕は「薪にしよう」と言ったら ばあちゃんは、「二、三日したらもう片方が流れて来て、ウチの前で一足そろえばいい」と待っていたが、その通りになった。

上流には、八百屋さんがあり、商品にならないので捨てられたキュウリや果物が川に流れてくる。それをせき止めて食料にしていた。二つに割れた大根や曲がったキュウリも切れればいっしょ。しかも冷えて流れてくるんだから最高だ。川に流れて来たもので、びっくりしたのは小さなお仏壇が流れて来たことだ。きっと、新しいお仏壇を買った人が、古いお仏壇をどうしたらええかわからんし、壊すわけにはいかなし、川にそーっと流したらええって誰かから聞いたに違いない。

ばあちゃんは、「お仏壇はお座敷に置くもの、川に流したらゴミと同じばい」

と「ナマンガブ」と言いながら拾っていた。

ばあちゃんは、地元では「お念仏ばあちゃん」として知られていたが、それはじいちゃんが亡くなってかららしい。じいちゃんが亡くなって、近所の人から「七人の子どもを残して大変ですね」と言われることがたびたびあった。そんな時はお仏壇に向かって、

「あんたはええとこいったな～。暑さ寒さもないやろ。腹もへらんし。年もとらんし、私は腰が痛うて……ナマンガブ、ナマンガブ」

時間があればお仏壇の前に座って「ナマンガブ」と言いながらじいちゃんに愚痴を聞いてもらったり、一日の出来事を報告したり……。

お仏壇の前だけでなく、川で鍋や釜を洗っている時も、道を歩いている時もまるで鼻歌のように口ずさんでいた。さすがに「ナマンガブ～豆腐一丁!!」と言った時には、お豆腐屋さんも自転車から落ちそうになっていたが。

### \*ばあちゃんと楽しいお寺参り

ばあちゃんの仕事が唯一の休みの日曜日、ばあちゃんは六時起きでお寺さん(養福寺)にお話を聞きに行った。お話を聞く以外にもお墓参りなどで、お寺にはしょっちゅう足を運んでいた。

お寺までは歩いて二十五分かかる。戦後、ばあちゃんは腰に紐をくくりその先には磁石を引きずって歩き、くず鉄を拾い集めて売っていたが、お寺に行くときは、着物に着替えて、その上に黒い羽織をさっと着た。それがお寺に行く“合図”でもあった。

僕も中学二年で野球部のキャプテンになるまで、ばあちゃんに付いてほぼ毎週お寺に行った。お寺に行けばいつも四、五人の子どもたちが僕のようにおばあさんと一緒にお寺に来ていた。

住職さんのお話は子どもの僕にとっては難しくてわからなかったけど、お寺でもらえるおやつの瓦せんべい。この

瓦せんべいがごっつうまい。僕はそれが楽しみだった。「お寺といえばお葬式」をイメージする人もいるけど、僕は本堂に入ると、中はキンキラキンで明るくて、子ども心にワクワクしたことを思い出す。

お寺でいつも歌っていた「恩徳讃」は「によーらあーいだあーいひいの～」って音程はめちゃくちゃやけど、今でも歌えるよ。お寺かち帰るときも道で「によーらあーいだあーいひいの～」って歌っていた。

今でも印象に残ってるのは、ばあちゃんがお説教を聞いている最中、突然手をあげて、「それは違うばい!!」

と言ったことだ。そしたらお坊さんが困って、

「……これはもう何百年も前の話ですからね……、あのう……これは……今の時代はちょっと合わないかもしれせんね～」

毎週お寺でお話を一生懸命聞いていたし、養福寺さん以外にも近くの照明寺さんや宗専寺さんなどでもお話を聞いていたばあちゃんだからこそ言えるのだろう。あれはおもしろかったな。

### \*お供え物大好き

子どもにとってお寺は楽しい遊び場だった。縁の下に潜ったり、かくれんぼをしたり、ついつい夢中になってお墓の上に乗ったらあかんのに乗ったりすると、住職さんからはよく怒られた。それでもみんなお寺は好きだった。それにお供え物があった。

住職さんに、「家のおっぱんさん(お仏飯)も仏さんは食べへん。このお供えも仏さん食べへんやろ。ちょうだい」「お供え物は取ったらいかん。あと、二、三日してから来なさい」

住職さんもそう言いながらもお説教が終わってしばらくしたら、「よし、もらってきなさい」

住職さんは厳しさの中にも「なんで取ったらあかんか知ってるか。お供え物はな、供えた人の気持ちがかもってるから……」と話してくれた。

ばあちゃんの「厳しさの中には優しさを見つける。やさしい言葉の中にも厳しさを感じ取れ」という言葉は、住職さんのことだと思う。

住職さんは毎月ウチにお参りに来てくれた。

ウチには似合わないほど立派なお仏壇があった。僕はばあちゃんがお盆になるとお供えするらっかん(落雁=菓子)が好きだった。お盆が終わるのが待ちきれなくて、正面から見える部分だけを残して見えない部分を取って食べた。

住職さんがお参りに来て線香つけようと立ちあがって、そのお菓子を上から見たとき、

「こんなお菓子売られてましたかな」

「いやあ、また孫がいたずらして食べたとですよ。向こう側を」「こうして前だけあればいい。人間も全部わからんでよか。夫婦でもお互いなんでも知っておかないといけないってことはない、正直に言って困ることもある。知らぬことも宝ばい」

住職さんはいつもうまいこと言うなと子ども心におぼえている。

(大乘 2008年5月号より)